駒澤地理 No.50 pp.1～26, 2014
Komazawa Journal of Geography

ドイツ，リンブルク地域における第二次世界大戦後の農村集落景観変化

櫻井明久*

Landscape Changes of Rural Settlement after the World War Ⅱ in the Limburg Region, Germany

SAKURAI Akihisa

筆者は，先にLimburg盆地と山地・Hoher Westerwaldからなる Limburg地域の土地利用変化の様相を対比しながら明らかにした。本研究は，第二次世界大戦後年における同地域の同じ二つの事例集落の調査を基に，農家家屋と集落景観の変化を明らかすることを目的とする。そのため，伝統ある家屋タイプと新しい家屋タイプを区別し，その家屋タイプ分布図を作成した。その結果，古くからの集落核・Ortには，山地では一棟建ての，平地では三側型の家屋が多く，とくに第二次世界大戦後，集落縁部に新しい建物が建設されていることが確認出来た。農村地域の集落とは言え，両村ともに集落核にはほとんど農家は無くなって，いわば郊外化している。それにも拘わらず，かつての農家の建築はかつての伝統形態を大きく変えずに残されており，皮肉にも現在も経営を続ける農家は，集落外移転農家として新しい農業機能を持った建物を集落外に展開してることが多い。

キーワード：ドイツ，集落，農家建物，景観変化，郊外化
Keywords: Germany, landscape changes, rural settlement, farmhouse, suburbanization

Ⅰ．研究の目的と方法

本研究では，第二次世界大戦以降のLimburg地域における農村集落の景観変化を検討する。すなわち，ドイツ南西部に特徴的な零細な兼業経営が多かった地域における農村集落景観の変化を，山地地域（Hoherwesterwald）と平地地域（Limburger Becken）とを対比しながら検討しようとするものである。Limburg地域は山地と平地からなるが，山地・Hoherwesterwaldは元々内畑・外畑制のもとで自給的な農地利用がなされ，一方の盆地，平地地域・Limburger Beckenは，三圃制の伝統をもった地域であった（桜井1989，1988，1987，1985，1983；Sakurai，1988，1987，1985）。

また，大きな意味でのドイツの国土利用計画上の分類で言えば，居住地・交通用地が25％以下の「農地・森林卓越地域」に属し，南西ドイツ中位山地の大半を占める農村地域らしい景観地域である（Hänsgen und Hantzsch, 2002, S.11参照）。すなわち，ルール・ライン大都市圏，とりわけその南半に位置するケルン・ボン大都市圏からは約50km以上，フランクフルト（ライン・マイン）大都市圏 からも30km以上離れて立地し，直接的な，つまり土地利用上の大都市（Agglomeration）とこの巨大都市とその周辺地域が機能的に結びついたものとしての大都市圏（Verdichtungsräume）の外側の地域に相当しよう。

*駒澤大学文学部地理学教室

山地地域は，第二次世界大戦後，とくに1960年以降には自給的農業が次第に姿を潜め，一方，非常に少数ではあるが酪農経営に専門化する動きが見られた。しかし，この山地地域ではもともとすべての農家が零細であったため，経営規模拡大を行うチャンスを活かせる農家は非常に希であった。そのため，食糧事情が好転し，兼業機会も安定し，社会保障制度も整った1970年前後になると，雪崩を打つように離農する農家が増え，利用放棄による未利用農地が急に出現し，一時は集落の農地面積の80％もの農地が利用放棄されるといった自治体も出現した（桜井1985，1989）。

一方の平地地域では，山地地域と同じように1960年以降は次第に自給的な農業の色彩は小さくなっていったが，大型家畜を飼養しないでも農業を機械化しながら小規模で兼業的に経営する養豚穀作型経営がそれなりに受け入れられ，止めていく農家が提供する農地は，少数ではあるが各集落に存在した経営規模拡大農家にスムーズに吸収され，未利用農地が出現することはなかった（桜井1983，1989）。

農業の土地利用とその変化という点では大きく異なるこの平地と山地において，農村集落景観の変化を，対比しつつ検討する。なお，この地域の集落形態は，ドイツ全体のなかでは，南西ドイツ中位山地に典型的な密集した塊村が卓越する地域（enge Haufendörfer）がとくに盆地地域にあり，一方山地地域は，疎な塊村（lockerle Haufendörfer）と小村（Weiler）とが混在する地域に相当する（Harversath und Ratsny，2002）。また，農家家屋タイプでは，ドイツ全体から言うなら，三側型家屋（Dreiseithof）が主であるとされている。

一方，筆者の観察から言うならば，この山地の農村の集落は平地地域に比べ規模は小さく，農家がより疎らに集積した塊村であり，農家家屋は一般には小型の一棟型で，居住部分と経済部分とが一棟内の左右に振り分けられたタイプであった。一方の平地農村の集落は一般により大型で，より密集した塊村であり，とくに集落の中核部周辺では農家間に庭畑などを挟むことは希で，軒を連ねたような連続した建て方が特徴的で，農家家屋は多棟型で，中庭を囲む三側屋敷（Dreiseithof；通りに面して母屋と出入り口門，後方に向かっては中庭と地上階が畜舎・上階が補助居住部の建物，後方には納屋・乾草小屋）か，中庭を囲む四側家屋（Vierseithof；先の三側家屋の建物に隣接農家との間の壁を利用した補助建物がある）になっていた。

こうした異なる集落景観をもった山地農村と盆地農村における第二次世界大戦後の集落景観変化を，土地利用変化の研究でも取り上げたZehnhausen村とNauheim集落（1970年以降のHünfelden村Nauheim集落）を事例として明らかにしたい（櫻井2013，桜井1989）。

この集落景観の変化については，丁寧に住居や農舎の形態をすべてにわたって調べ上げ，その結果から建物群を分類するという手法が丁寧な方法であろう。筆者はそうした形で，ボン周辺の農村集落の調査を行ったことがある。しかし，この方法は多様な形態とその変化を調べることができるが，調査のためには長時間を要するし，農家家屋自体が非常に多様であるために客観的な全体像の把握がしにくい。そこで，本研究では簡便法を採用して調査することにした。すなわち，最初の土地利用調査を行った1977年調査時に，先に述べたような山地農村の基本型の農家家屋・屋敷取りと平地農村のそれを基本としてまとめ，その農家家屋の変化と新しい家屋の建設の様子をみることにしようと考えた。その際，もともと基本型を示していなかった農家を別扱いにすることにし，基本型の農家のうち，母屋・居住部，経済部（納屋，畜舎）などのいずれかを変えたかどうかを調べる形で調査し，加えて新しい住居の存在と分布を確認する形で研究することとした。

Ⅱ．Zehnhausen村の集落景観変化

Zehnhausen村は，正式にはZehnhausen bei Rennerod村と呼ばれ，同じWesterwaldkreisの南西側にある同名の村・Zehnhausen bei Wallmerodと区別されている。このZehnhausen村は，2013年現在までも独立した自治体・Gemeindeではあるが，実質的な行政はVerbandgemeinde RennerodとしてRennerodを中心とする22町村で執行されている。このVerbandgemeinde Rennerodは，Gemeindeの合併を行わないラインランド・ファルツ州で採られている広域行政システム構築のための在り方であり，隣接するヘッセン州，ノルドライン・ヴェストファーレン州が形式も実質もGemeindeの統合化がされているのとは異なる。しかし，村として独立はしているものの，農業センサスなどのGemeinde統計の一部ですら，近年では，公表単位としては小さすぎるため，プライバシー保護の観点から様々な統計項目の数値が伏せられてしまいがちで，Verbandgemeindeのレベルで公表されるに過ぎないことも少なくないし，行政も実質的にVerbandgemeindeで運営されることが多い。

Zehnhausen村は，20世紀初めには総戸数40戸程度で，1960年代75戸程度，1977年90世帯であり，いわば日本における集落である。現在人口は391人（2011年センサス）である。なお，筆者の最初の現地調査は1977年であるが，1970・71年センサスでは人口は330人，87世帯で，30戸の農家が存在した（1977年の聞き取り調査では農家数は23戸にさらに減少していた）。したがって，近年までも世帯数と人口はほぼ安定して増加してきた一方，農家数は急激に減少してきたと言えよう（桜井 1985，1989）。2003年の聞き取り調査によれば，当該村に居住する農家は兼業の2軒のみになってしまい，入り作農家が周辺集落2集落から4軒，いずれも100haを超える農家が入り作をしている（櫻井 2013）。

Zehnhausen村は，上位中心都市とされる人口約10万の都市・Siegenから約25Km，同じく上位中心都市に位置づけられるLimburg an der Lahn（人口約3万）・Diez（人口約1万）からも約25Kmの位置にあり（Sacks 2002参照），人口約4,000の田舎町Rennerodからは約4km，周辺と合わせて中位中心都市となる人口約6,000の田舎町Bad Marienbergからも約6kmに位置し，ケルン・ボン大都市圏からは50Km，フランクフルト大都市圏からも50kmの距離にある。このため，直接的な都市化の影響は目立たない。なお，広域行政圏をなすVerbandgemeinde Rennerodは22Gemeindeからなり，人口約1.6万人である。

1977年の調査結果からは，この村が土地利用の上では牧草地の割合が高いという特色があったが，共同放牧地と内畑・外畑制で利用されてきた一般農地を組み合わせた伝統的土地利用方式は崩れ，畑地が急激に減少しつつあったこと，利用しにくい縁辺部や小河川沿いに位置するため湿っているような自然条件のよくない農地などが利用放棄され，一部は植林されていることを明らかにした（桜井1985，1989）。また，2003年の調査結果を基にした先の研究では，1977年以降の農地利用の変化を明らかにしたが，近年では，農地自体は減少傾向にあるが，利用放棄農地・未利用農地は姿を消しており，畑はほぼ実質的には完全消滅と言ってよいような状況になり，植林地は若干の拡大をみている。また，草地利用については，相対的には畑地に代わって増加しているが，その内訳を見ると，放牧地がほとんどなくなってしまい，利用区画単位の大きな牧草採草地が村のほとんど全てを覆い尽くすような状態になった。しかも，その牧草採草地の牧草栽培は必ずしも質は高くない。それらの農地利用変化は，村内経営者の大幅な減少と，わずかに残った農家がすでに兼業で，家畜すら飼養せず，単に牧草を刈り取って販売するか補助金をもらう形になってしまっていることと，入り作する大規模酪農家ら4軒は，農家敷地から遠いこの村の農地を牧草採草地としてのみ利用することが多いことに理由が求められた（櫻井 2013）。

こうした山地地域の村の農業の衰退傾向を説明すると，日本における山間地の限界集落を思い浮かべられがちである。しかし，この集落は，世帯数も，人口も，第二次世界大戦直後の一時期以外，着実に

写真 1　Aタイプ：典型的零細兼業農家・一棟型（1977年：経済部分前には堆肥）

写真 2　Aタイプ：離農した元零細兼業農家・一棟型（写真 1 の2003年）

写真 3　Aタイプ：典型的な拡張一棟型小規模農家（1977年隣村 Reheの事例：経済部分前には堆肥）

写真 4　Aタイプ：拡張一棟型の元小規模農家（2003年）

写真 5　Bタイプ：曲がり屋型拡張元農家（維持型）

写真 6　Bタイプ：曲がり屋型拡張元農家（美化型）

写真 7　Cタイプ：多棟型・囲い込み型兼業中規模農家

写真 8　戦前に集落外移転し、経営規模を拡大した農家（隣村・Niederroßbach村）

写真 9　nタイプ：元々の非農家

写真10　Aタイプ：集落内の美化型元農家

写真11　Aタイプ：集落内の美化型元農家

写真12　Nタイプ：集落内の新築家屋

写真13　nタイプ：新住宅地区の住宅１

写真14　Nタイプ：新住宅地区の住宅２

写真15　消防団施設と集会場

写真16　集落の小広場と共同水場（開発後）

写真17　旧村役場（元小学校）

写真18　チャペルと墓地

写真19　ガソリンスタンドとホテル・レストラン

写真20　かつての一軒の何でも屋（1977年）

写真21　移動販売車

写真22　整備された集落内道路

増加してきた。こうした，農業上はある意味問題な地域であるが，ドイツでは社会経済的には深刻な問題地域として取り扱われてはいない。このような旧西ドイツの間接的な都市化地域，郊外化地域にあるドイツの村の集落景観変化を調べることにした。

調査にあたっては，元々基本的だと思われる居住部分と経済部分とを一棟の中に納めた切り妻建ての農家をAタイプ（写真１，２，３，４）とし，その改良型，拡張型であろう曲がり屋型の農家をBタイプ（写真５，６），多棟型の農家をCタイプ（写真７）とを区別することにした。また，1977年時点でもこれら３類型に収まら

ず，もともと農家としては建設されていなかった一般住居，建物をnタイプとして区別し，1977年以降に建設された住居をNタイプとした。また，それら以外の公共的な建築とサービス施設などを区別することにした。

これらの分類によって集落の様子を地図化したものが図1である。これによれば，まず，全体として一棟建てのAタイプが多いことが認められる。ただ，このAタイプの農家家屋は村の中心として整備された広場に近い集落の中核部Ortにあり，しかもそこを通り抜けるHauptstr. に沿った地区はOrtの中でも最も家屋密度が高い地域に相当し，そこには，Bタイプ・一棟建てを変形したタイプ・曲がり屋型家屋も多く見られる。このHoherwesterwaldにおける本来の建築様式の基本は写真1，2，3，4の事例のような単純な切り妻の一棟建て・Aタイプであったろうと思われるが，経済面積・建物面積を確保するために棟・建築物の長軸の長さが敷地に対して不足すると，Bのように棟の向きを直交させて居住部分を増築付加したり，経済部分を拡張したりしたものと考えられる。さらに経済部分の拡張が必要になった場合には，C（写真7）のように，多棟建てにして対応したのであろう。実際，一軒しかないこのCタ

図1　Zehnhausen村における住居タイプと公共施設等の分布

イプの農家は，1970年代になってから急速に経営規模を拡大し，1977年時点で村内では最大の経営であった兼業農家である（桜井 1989；p.94の表3-7中の農家③，p.98/99説明参照）。その拡大に合わせて，元々は棟の方向が異なる二棟からなるBタイプであった建物の後方に平屋の畜舎と納屋を増設した形となったのであろう。

なお，この地図中の土地区画は1934年のものを利用しているので，その後分筆されたり，合筆されたりしているので，なるべくその位置に記号，番号を付したが，新しい建物の位置は少々ずれている可能性が高い。ただし，建物大きさは様々であるので，この図では位置関係を読んでいただきたい。なお，それら建物間は区分はしにくかったが，原則，庭ないし庭畑である。

Aタイプの切り妻一棟建ての農家は，ほとんどが平入りで，その玄関部分の左右に振り分けて居住部分と経済部分とがあった（写真1，2，3，4参照）。しかも多くのこのタイプの農家家屋は農業経営上零細であったため，建物も小型（写真1，2）であったし，とくに零細な農家は経済部分が非常に小さく，時とすると居住部分だけでできていると言ってよいような形態もあり，妻の部分に片屋根や平屋根を張って経済部分や納屋を確保するような形態も見られた。また，経済部分のうち，居住部分に近い方には畜舎があり，そこに人の出入り用，言わば勝手口と思われる通用口も設けられていることが多かった。居住部分から離れた部分には，大きく扉が設けられ，家畜の出入りや荷車・トラクターの出入りに使われ，その出入り口近くは作業場として利用されていたのであろう。経済部分の上階は乾草置き場として利用された。なお，Aタイプは経済部分や居住部分の拡張に際しても，棟の方向を変えずに拡張できたものであり，写真2，3は，棟を同方向に取りながら拡張されたタイプであろう。一方，Bタイプは棟の方向を変え，直交させたたタイプである。また，1977年には，まだ家畜を飼養している農家があったので，この畜舎前には堆肥置き場が設けられていた様子が見て取れた（写真1，3）。

なお，写真3は1977年における近隣のRehe村の農家であるが，これよりも建物本体部の大きい，すなわち経済部分を大きくせざるを得なかった大規模な農家は，現在の建物構造から見られる範囲では，また統計でさかのぼれた範囲でも，このZehnhausen村にはもともと存在してこなかったようである。写真8はZehnhausen村に入り作している農家で，当村に関係する最大の農家であり，隣村Niederroßbachの経営者による経営である（桜井，1989；p.94の表3-7中の農家①，p.94－97説明参照）。この写真8では，母屋・居住部は写真右，建物の表奥の端に位置しており，その棟続きの手前側は牛舎であり，裏手に乾草小屋と機械収納のための倉庫がある。こうした大経営はもともとZehnhausen村にはなかったし，第二次世界大戦後もこの村からは発生はしてこなかった。しかし，近隣集落には1960年前後に政府援助の元で計画的に集落外移転し，経営規模を拡大した農家もあった。この写真8の農家の場合は，1938年に，すでに通勤兼業のために集落縁部，ちょうどZehnhausen村とNeustadtとの境のかつての鉄道駅近くに移転していたため，1970年代にも経済部分の拡張が可能であり，1970年以降急速に経営規模が拡大できた。皮肉にも，農村地域であるというのに，現在生き残っている中核となる大規模農家は集落中核部・Ortには存在しないのである。

両大戦間，および第2次世界大戦後には，実質的に農業を行わない世帯があらたに成立し，彼らも住居をこの村に建設したであろう。1939年の農家数は51であり，そのほとんどすべてが戦前の時点で兼業であった。1939年の世帯数は60であったから，両大戦間にも非農家が成立しだした可能性がある。その後，農家数は1956年の56軒まで増加したことが分かっており，1960/61年の世帯数は75であったから（桜井，1989，p.75），調査した77年の時点で純粋に一般住宅として建設された家屋も20棟前後はあったものと推定される。今回の調査で，もともと農家ではなかったであろうと判定した家屋は21軒であった。これらのうち何軒かは簡単な作業小屋や畜舎を設けて農業を行っていた時期があったのかも

知れない。こうした農家ではなかった居住用建物で1977年時点までに建設されていた家屋nタイプ（例えば，写真9）は，村の中核部より周辺に多く，かつての宅地部分とに連接しながら，とくに南と北にそれらが立地，分布していた。

集落の核の部分に注目してみると，一般的には，A，Bタイプのような古い構造を保ちながらも維持管理されて住宅として利用されていることが多い。こうした事例では，かつての経済部分をそのままにしてある場合（写真2，4，5）と，経済部分を大幅に改築して居住部分にしているものや（写真6），二世帯型住居に変える場合すらある。また，構造は変化していないであろうが，まったくファサードを変えてしまったり，美しい壁面に整えるような事例もある（写真10，11）。一方，あまり美しくは維持できず，みすぼらしい佇まいを見せる場合もあるし，ひどい場合には，納屋の屋根が一部落ちている元農家も見受けた。伝統的な家屋型が維持されていることが多い集落中核部にも，とくにその縁部に，まったく新しい新興住宅地の建築同様の建築も建設されている（写真13，14）。

1977年時点で，少々集落部とは離れて立地したのは，国道沿いのホテル兼レストランの経営者がすぐその裏に作った住居と，集落の南西に続く道の両側に2003年までに新築された連続する住宅となった箇所の当初の2軒だけであった。この南西側の道路沿いの住宅nタイプ（写真13）は，この道路沿いの住宅地開発の先駆けになったものであり，2軒とも外観は木組みの山小屋風の住宅であったことを印象的に思い出せる。しかし，別荘風ではあったが，当時から，この住宅は別荘ではなく，日常の生活が営まれる一般住居であった。今日では，この2軒が立地する道路沿いにさらに住宅開発がなされ，先の2軒とよく似た木組みの山小屋風の住宅が多く建設され，白樺の並木道が整備されている（写真14）。

1977年以降建築された住居は，この山小屋風住宅地以外に，その北側に延びる道路沿いと集落北端部に集中しており，それら住宅は一般の戸建て建築がほとんどで，建築様式も大都市郊外の一戸建て地域の雰囲気と同じである。また，集落南東端にも新築住宅が建設された。いずれの新築住宅もスプロール的ではない。宅地は連接的に利用されており，それら住宅地より集落内側には農業用の土地利用は見られず，多くが一般家庭用の庭園として利用され，まれに自給用の菜園が設けられている箇所も散見される。一部これら地区に接するかのように放牧地が2箇所に見られるが，これらは趣味の馬用の放牧地である。なお，村内にはこれら以外の放牧地は見られず，草地はすべて牧草採草地である。

これら新しく建設された住居は言わば新しい郊外住宅地の景観であり，村の核の部分を占める伝統的農家景観とは大きく異なり，対照的である。

集落の核としてのシンボルは，集落の集会所と消防団の消防施設①（写真15）が村の中心部にあり，そのすぐ北側には小さな広場があり，77年には移動貯蓄銀行自動車が週二日そこで営業をしていた。その広場は，「我々の村を美しく」運動の一環で整備され，シンボリックな共同水道施設②（写真16）がおかれている。また，地図1中の③はもとの小学校（写真17）であり，77年には役場（実質的な行政機能はすでにRennerodに統合化されていたから，ここは戸籍簿管理などシンボリックなBurgermeisterの仕事場）として使われていた。地図1中の④は司教の常駐しないチャペルであり，隣接して墓地も併設されていた（写真18）。⑤は，卓球場であり，⑥のサッカーコート脇の脱衣所とともに集落のスポーツクラブの建物であった。

それら公共施設とは別に，地図1中の❶はガソリンスタンドであり，77年以降に設置された。そのとなり❷は77年にすでに存在していたホテル兼レストラン（写真19）で，これらが2003年時点のサービス施設であった。1977年時点でも，この村にはドイツの多くの集落にある社交場・居酒屋・バーがなかったが，この国道沿いのホテル兼レストランが集落外の利用を含めながら，村の居酒屋の代替施設として機能していたのであろう。また，77年には集落唯一の小売商（写真20）で，伝統的Aタイプの小農

家家屋の経済部分を商店としていたが，2003年にはすでに営業がされていなかったし，もう一軒がその後商店を開設したようであったが，それも経営を止めていた。その代わりなのであろうか，肉の移動販売車（写真21）を見ることができた。この山地地域は兼業農業以前は伝統的な行商地域（広い地域で長期間にわたって商うタイプ）として有名であったとされるが，現在では逆に日常的な小売り商業の行商が入り込んでいることになる。

この村では，村の中心部の景観は古い伝統的な建物構造と佇まいを持ちながらも，一般的には美しく維持されており，整備された道路（写真22）とともに，豊かな農村であることをイメージさせており，中核に景観的には農村の光景を残しながらも，機能的には，中核部を含む集落全体が，辺縁部にある郊外住宅地同様の一般住宅地へと変容を遂げていると言えよう。ただ，従来からの集落内のサービス機能は次第に減少しつつあり，たまたまこの集落はSiegenとフランクフルト大都市圏を結ぶ幹線国道B54が走っているため，ガソリンスタンドができ，ホテル兼レストランは残されている。しかし，役場機能もRennerodに統合化され，実質的には様々な機能が統合化され，当該集落には消防団施設しかなくなってしまったし，小売商も完全になくなった。こうした意味では，現代社会における最低次の中心地機能が失われかけてきており，歩いては最低次のサービスが受けられなくなって来ている。しかし，新しい住居もそれなりに増え続け，周辺集落も含めれば十分に機能的な住宅地になっていると言えよう。

Ⅲ．Hünfelden-Nauheimの集落景観変化

Nauheimは，他のヘッセン州の諸市町村と同様に1970年前後に市町村合併が進行し，1971年に周辺6集落・旧Gemeindeと合併し，新Gemeinde・Hünfelden村を成立させた。それまではNauheimは長期にわたってGemeideとして独立した存在であったが，現在では，Hünfelden村のNauheim集落と呼ぶに相応しい。それは，日本における集落，部落，大字くらいの感覚に等しいものであろう。この意味で，現在はGemeindeではないが，先のZehnhausen村と対比できる景観的な単位である。

Nauheim集落は，20世紀初めには115世帯前後で，人口は560人程度であった。その意味ではもともとZehnhausen村の3倍弱の少々大きな規模の集塊村であった（桜井 1885，1989）。Nauheimは，上位中心の下層に属するリンブルク市・Limburg an der Lahn（人口3.4万）中心部から約7km，フランクフルト大都市圏からは約30kmの位置にある（Sacks 2002）。この集落も直接的には都市化の影響は見られない。

当該集落の北北東3kmには，Limburgとヴィースバーデン・フランクフルト・マインツらを結ぶ鉄道沿線に駅も開設されていた。その駅の位置するNiederbrechen（2006年人口約4,000）などでは両大戦間にすでに人口集積が始まって，第二次世界大戦までにはより大きな集塊村に成長していた。これら集落と比べると，鉄道路線からは少々離れていたため，Nauheimの郊外化の進展は遅かった。

この旧村Nauheimは，1939年には，161世帯，人口は若干減少して562人となっていた。この年の農家数は，86戸であった。第二次世界大戦直後，引き上げ者が居住していた1949/50年には197世帯へと増加し，60/61年には一旦1939年段階に近い164世帯に戻り，70/71年には再び増加に転じ，219世帯となった。しかし，第二次世界大戦後の農家数の減少は急激で，引き上げ者がいた1949/50年には農家数が101戸と一時的に大きくなっていたが，1960/61年に67戸，70年には37戸となり，先の調査時点1977年には28戸となっていた（桜井 1989，p.105）。そして2003年には聞き取り調査によれば，農家数は9戸となってしまった（櫻井 2013）。しかも，うち3戸は耕地整理期に集落西部に集落外移転した農家であり，Ort・集落部に居住する農家は6戸に過ぎなくなった。その農家のうち，いかにも経営を

行っていると言うに相応しいのは50ha以上の１戸のみで，この農家だけは集落内の景観観察で農業経営していることが外観からも識別できた。集落内にあるはずの残りの４戸は，聞き取りによれば10～15haが１戸，15～20haが１戸，２戸は2haに満たずであったが，それら農家すべてが，すでに趣味の域を出ず，家畜も飼養していないし，穀物や牧草を栽培して売却してしまうような形で経営されており，経営から撤退するであろうことが確実と専業農家からは考えられていた。その結果，外観からはすでに農業を止めてしまっている元農家とは区別がつかず，これら零細な農家は

写真23　Ｘタイプ：伝統的な三側屋敷（1977年）

写真24　Ｘタイプ：ペンキを塗って絵が描かれ美しく保たれている三側屋敷

写真25　Ｘタイプ：集落で二番目に古い農家母屋

写真26　Ｘタイプ：写真25の農家の畜舎・納屋

写真27　Ｘタイプ：三側屋敷の納屋を居住用に変えた例１

写真28　Ｘタイプ：納屋を居住用に変えた例２

写真29　Ｎタイプ：集落核部の新築家屋の例

写真30　ｎタイプ：1970年前後に開発された一般住宅地の通り（1977年）

写真31　ｎタイプ：1970年前後に開発された一般住宅

写真32　Ｎタイプ：1980年代以降に開発された一般住宅の例１

写真33　Nタイプ：1980年代以降に開発された一般住宅の例２

写真34　Nタイプ：1980年代以降に開発された一般住宅の例３

写真35　村の中核部の通り景観（1977年）

写真36　村の中核部の通り景観（居酒屋前；2004年）

写真37　混合経営型の集落外移転農家

写真38　村内に居住する中規模農家の伝統的な庭畑光景

写真39　通り裏の庭畑風景

写真40　集団的な庭畑区画の風景

写真41　都市近郊にあるような庭園としての庭畑の風景

写真42　保育園と集会所（元の村の小学校）

写真43　司祭のいる教会と墓地

写真44　唯一の商店（衣料品とミニスーパー）

筆者には外観からはそれが農家であることを確認できなかった。なお，本集落には出作農家はあるが，Zehnhausen村のような入り作農家は確認出来なかった。

1977年の調査では，この村で1959年まで維持されていたことが分かっている伝統的三圃制，すなわちZelge・共同体的な土地利用ブロックに縛られた三圃的土地利用は完全にみられなくなった。しかも，Zehnhausen村とは異なり，農地は利用され続け，植林地も利用放棄農地も出現しなかったし，草地と畑地の構成にもそう大きな変動はなかった。ただ，栽培作物に注目すると，耨耕作物と飼料作物は急速に減少し，代わって穀物栽培が増加してきた。この作物の構成に注目すると，1970年頃に穀物栽培の割合はピークとなり，1977年にはかつての休閑代用作物たる耨耕作物や飼料作物に代わって冬ナタネなど大規模機械化農業に適した非穀物の畑作物が出現してきていた。こうした土地利用と栽培作物の変化は，養豚穀作農家の兼業農業経営としての残存の可能性の高さと大規模経営の出現から説明された。この第二次世界大戦後から1970年代までの土地利用の変化から，伝統的な三圃制が維持されてきた諸要因を考えることができた。すなわち，経営規模がそう大きく異ならない中心的な階層が存在し，彼らが農地のかなりの部分を占め，それら農家が同じ土地利用規範を持ち，経営地を各Zelgeに分散所有し，利用してきたということが背景にあると推察できた。また，2003年の調査によれば，兼業の養豚穀作農家は次第に減少し，収入は度外視し，もはや単にトラクターやコンバインを使って作業しているというレベルの趣味としか言えない農家がわずかに残るだけで，ほとんどの農地を100ha以上の農家が利用し，大規模経営の機械化農業の特色が土地利用に反映されることになった。すなわち，機械化に適したより大きな区画単位利用が一般化し，そこに冬ナタネなどの商品畑作物，青刈りトウモロコシの飼料作物，再び出現した休閑地などが大きな割合を占めるようになってきた。その代わり，穀物は若干減少し，言わばかつての三圃的な利用に近い構成に戻り，畑地の安定的で効率的な利用が進んでいるように思われる。

Nauheim集落のようなLimburg盆地の村々では，言わば自然条件に恵まれた平地地域の農業は安定して企業的な経営へと発展しているように見て取れるが，そうした地域の農村像，農村集落の景観はどのように変化しているのであろうか。こうした旧西ドイツの農業適地農村，しかも間接的な都市化地域にある農村の集落景観の変化を調べることにした。

調査にあたっては，伝統的建物形式・屋敷取りが保たれているかどうか，伝統的建物形式のいずれの部分が残っているのか，伝統的形式によらない建物と，先の調査1977年以降に建設されたかどうかという分類をすることにした。

すなわち，この地域の伝統的な農家は三方に建物を配して中庭を取り囲み，残る一方を隣家と接する形（三側屋敷）になっていたが，これをXタイプとした。写真23に典型的に見るように，建物は，写真右手の道路に面しては母屋と大きな可動型の門（ここでは簡易化されている）があり，この母屋に接して，後方（写真左手）に向かって畜舎・その上階の副居住部（写真中央部）があり，その奥，道路と反対側（写真左手側）に納屋が配される形になっていた。なお，母屋はほとんどが短めの棟を持つ切り妻造りで一方の妻の部分の表側が門となっていて，中庭に面する方に母屋出入り口が設けられている。納屋も切り妻で，その棟の長さは母屋部の棟と門の幅を加えたものになる。なお，納屋と母屋は並行に建設されており，棟の方向が同一である。また，畜舎・副居住室部は大きな場合は切り妻で，幅が狭い小さなものは中庭に方向に傾斜を付けた片屋根になっていることが多かった。この写真23の農家は，隣接地の旧農家が第二次世界大戦時に爆撃破壊され，その結果その西側から写真が撮れたものである。写真24は，2003年に撮影したもので，美しく維持管理されているXタイプの例である。しかし，多くのこのタイプの農家は連接しているためすべての建物を写すような写真が撮れないし，十分な観察がしにくかった。

写真25・26の農家も伝統的なタイプの農家でXタイプに分類したが，母屋部である写真25と畜舎・納屋の写真26の間に道路を付けられてしまった非常に特殊な事例であるが，建築の形態自体は非常に伝統的なものであると言える。Xタイプの母屋，畜舎（＋上階の副居住部），納屋の三つの建物部分のうち，母屋だけが残されているものをYタイプ，納屋だけが残されているものをZタイプとして挙げることにした。論理的には畜舎・副居住部だけが残されることも可能性としてはあるが，家畜を飼養し続けている農家はほとんどなくなってしまったし，現実にこの建物部分を維持する農家は存在しなかった。

なお，家屋タイプ分布図作成に際しては，集落核周辺の宅地と庭，庭畑が連接する範囲だけを示した。なお，土地区画は1969年の耕地整理事業後の区画である。そのため，現状とも異なり，一区画に複数軒の家屋があることもあるし，複数区画に1軒が建てられていることもある。この図化範囲以外の建物には，3軒の集落外移転農家がある（櫻井 2013，p.22図7参照）。この地図では，X，Yタイプは敷地の表通り側に母屋が位置を占めることがほとんどすべてであり，n，Nタイプは幾分敷地中央を占めることが多い。また，凡例には庭畑を示しているが，敷地が大きな場合の農家家屋などでは，家屋の周囲に庭畑，ないしは庭があることがある。煩雑さを避け，こうした細かな庭畑，畑は省略してある。

先の分類にしたがって作成した分布図，図2によれば，まず，集落中核部では，三側屋敷と呼ばれる

図2　Nauheimにおける住居タイプと公共施設等の分布

Xタイプの農家が非常に多く，圧倒的である。地図化は行わなかったが，1977年の景観観察を思い返すと，このタイプはさらに多かった。したがって，この30年間近くで幾分減少してはいるが，いかにもこの屋敷取りの家屋配置，三側屋敷がこの村の，この盆地地域の基本型であることが分かる。

Xタイプの農家はこの盆地地域の伝統的な農家の屋敷取り・家屋タイプであるが，2003年現在も実際に農業経営を行っている農家であるのは，4軒であり，外観から農家であることが分かったのは，大規模に経営を続ける養豚・穀作農家1軒のみで，他3軒は外観からは識別できなかった。すなわち，伝統的な三側家屋の家屋のほとんどが農業をやめており，それでも伝統的な家屋をそのまま基本的な屋敷取りを変えずに使い続けていることが分かる。なお，1977年における調査時には，農家と非農家の区別がある程度可能であった。それは，非農家が家屋美化に心がけはじめており，ペンキを塗り替えたり，家屋に絵を描いたりしはじめていたからであった。しかし，2003年には，いずれの旧農家の家屋も美しく保たれているようになった（写真24，25，26）。なお，集落の中核部分には，この伝統的三側屋敷の配置を保ちながら，したがって，Xタイプに分類されているものの中には，納屋部分を居住用に改築した例（写真27，28）などもあったが，決して多くはない。

中核部にも，希には，完全に三側の建物を廃したり，建物の一部のみを保存して，新たな住居を建設した例もある（写真29）。

また，1960年の二度目の耕地整理・集団的な集落外移転期以前に，自主的に集落南の縁部へ移転していた農家2軒をみると，うち1軒はすでに農業を止めており，母屋など居住部分しか残されておらず（Yタイプに分類），もう1軒は広い敷地に三側屋敷タイプで建設され，隣接する家屋がないので，屋敷森状になったコの字型の配置に見えたが，すでに農業撤退状態にあるように観察された。

Yタイプ，母屋だけが残されたタイプには二つの亜型がある。その一つYタイプは元々はXタイプであった三側屋敷の母屋部が残されているもので，集落の中心部に多く，Xタイプに挟まれながら存在する。それらの多くはこの30年間に納屋部分と畜舎部分を処分したものである。しかし，母屋を完全に新築したものも集落中心部に4軒ほど存在した（写真29参照）。一方，村の西端などにあるものyタイプは，母屋自体が道路から幾分セットバックして建設されていて，もともとXタイプの農家母屋として建設されたものではなく，1977年よりかなり前に，多分，両大戦間に，非農家の一般住宅として建設されたものであると考えられる。いわば少々古い建築であるとは言え，1970年前後から急速に建設された新築住宅と同じ理由から一般住宅として成立したタイプであり，Yタイプの亜型としてyタイプとして区別した。

Zタイプは，三側家屋のうち，納屋部分のみが残されているタイプで，納屋は農業用でないにせよ，そのまま倉庫・車庫などとして利用されているものである。Bonn周辺などの人口増加の激しい地域の集落には，こうした大きな納屋を利用して小規模のスーパーマーケットの店舗に転用している例なども見られたが，ここでは，母屋・畜舎部分をバーにして，納屋を附属のダンスホールとして利用している例が見られた。また。この納屋部分のみを改築して居住用にしているものもこの集落にはみられなかった。納屋のみが残されている例は多くはないが，母屋も残しつつ，後ろの納屋を居住用に変えた例は先に挙げたように2軒あった（写真27，28）。

なお，このXタイプに入れて示したが，当集落で二番目に古いとされる農家母屋は，この地方特有の伝統的な木組みの家屋であり，しかもライン地方の頁岩，ライン・シーファーの天然スレートで屋根と壁を葺いた母屋（写真25）である。その母屋は畜舎・納屋（写真26）の間を道路が切る形に分断されてしまったが，1977年時点ではフランクフルトにある世界企業のエリート・サラリーマンが購入し，古い設計図にしたがって，妻とともに，週末などにできる限り修復にあたり，古い建築への居住・修復を楽

しんでいた。なお，2003年調査時には，母屋は絵本作家に所有・利用は移されたが，現在までも美しく維持・管理されていたし，納屋・畜舎部は居住用に変更された。写真25，26は2003年のものであるが，畜舎・納屋も古い佇まいを残したままで利用されている。このように古い農家家屋を購入し，美しく維持管理するのは高級な趣味になっていたのであろう。

また，1977年時点では，ライン・シーファーで葺かれた屋根を載せた門が集落中心部のXタイプのの農家に多く見られたが，動きにも弱いし，よほど美しく維持しないと見栄えが良くないこともあってか，ライン・シーファーで葺いた母屋屋根はかなり残されている一方，門の屋根をシーファーで葺いたものはほとんど無くなってしまった。門全体が可動であると自家用車（かつては農業用機械や家畜であったろう）の出入りに便利であり，そのためには軽い方がよいのであろう。

nタイプは，近年建設された居住用の新築家屋ではあるが，すでに先の調査1977年までに建設されていたものである（写真30，31）。このタイプの建物は，最も多い建築地区としては集落北東部の大きな区画一帯で，南東縁部にも同じように計画的に建設されたものが認められた。また，整形の大きな区画は作ってはいないが，南に向かう道路に沿ってと北縁部に小区画の拡張された住宅地が建設されていた。Zehnhausenに比べ，このnタイプは多く，幾分早く住宅地開発されたことが分かる。Nタイプは，1977年以降に建設された住宅地であり（写真32，33，34），1977年までに大規模開発された地区の北側に拡張されたものである。なお，その一部は1977年の調査時には宅地開発が行われていた。また，このタイプに入る三側屋敷のすべての昔の建物を取り壊して新築住宅を建設した例は，数こそ多くはないが村の中核部にもみられた。

nタイプ，Nタイプの家屋が集落縁部にある整形の区画を占めている景観は，日本における都市郊外の新興住宅地と同様である。ただし，敷地約20m×30m程度，すなわち約600m^2，200坪前後と区画も大きいし，家屋も大きめである。言わば日本の高級住宅地のような佇まいである。また，集落中心部の伝統的な三側屋敷と異なり，中庭を取り囲む敷地利用形式ではなく，日本の宅地利用と同様，宅地の中心に住居を置く形になっている。そのため，道路から建物までに芝を中心とする小さな飾り庭が設けられることで家屋間に距離が生まれ，とくにファサードには草花を配した小庭が置かれるため，村の風景は急に開放的になった感じがする。その住宅はほとんどが一戸建て住宅であり，まれに左右，ないし上下に振り分けた二世帯型住宅がある。二世帯を超える多世帯向け住宅はほとんど見られない。

一方の集落中核部の道路に沿っては，道路に直接接する形で農家母屋と門が連続しており，狭隘な印象になっている（写真35，36）。

なお，1960年に2度目の耕地整理事業施工時に行われた集落外移転では集落西側に3軒が12haの経営面積の農家として農地をその周囲にまとめる形で，集落西端に移転した（桜井 1989，図4-5，4-6参照）。それら農家は現在も経営を続けており，この集落の農家と呼ぶに相応しい，中核農家にそれぞれ成長している（桜井 2013）。これら農家は，いずれも1960年の集落外移転時には言わば近代的な三側屋敷（すなわち，それぞれ母屋を道路に面するように配し，その後方に家畜小屋とクーラーステーションなどを伸ばして作業用の中庭を囲い，後方に農業機械倉庫，納屋を配した形態で，建材などは近代的な簡易なものになってはいたが，形式だけを言うなら伝統的な形態を採っていた）であった。そのうち1977年にも，2003年にも，村内最大の経営規模に成長した農家は，先の1977年の調査時点ですでに無家畜畑作専門経営となって畜舎を使用しなくなり，それが納屋の役の一部を果たす形に変わっていたし，2003年現在では，言わば多棟型の屋敷利用に変化してしまった。他の2軒の集落外移転農家もそれぞれの経営の要求に従って大きく屋敷利用，農舎建築をかえていった。なお，最大の農家は，農家母屋だけはそのまま使い続けており，経営を引き継いだ息子夫婦がそこに住まい，退職した老夫婦は村内

の新住宅地区に住まいを移してしまった。また，他の1軒は，近代的な農家母屋を残しながら，元の宅地横に居宅を新築中であった（写真37）。もう1軒は元の近代的な農家母屋を残しながらその隣接地に新たな住居を設けている。この村では，この3軒の農家部分のみに，現代の農業に直接関わる建物景観が認められ，いかにも現代の農業を映す景観であるが，伝統的な農家家屋風景が残る集落内には，皮肉にも，もはや現代の農業に直接関わる光景がほとんど認められなくなってしまった。

集落部・Ortの周縁部に置かれたきた園地の多くは，1977年時点では家庭菜園の役を果たしていたが，次第に家庭菜園的な色彩（写真38，39）から都市周辺のシュレーバーガルテン状に変化しており，芝地と草花を植えた庭園となってところが多い（写真40，41）。また，その園地よりは大きめの，リンゴ樹の植えられた放牧地（Obstweide）らの一部は，リンゴ樹が取り払われて機械化に対応した大きな区画の普通畑繰り入れられたものもあり，もしくは家畜は飼養されてはいないが，芝の広い園地として残されているものもある。

集落の核としてのシンボルは，かつての小学校，現在の保育園と集会所①（写真42）であり，加えて教会と墓地②（写真43；東側3区画を含む計4区画がそれらに利用されている），およびかつてパン焼き竈小屋があったという場所に置かれた消防施設③である。さらには，夜間照明までついたサッカーコートとそこに置かれたスポーツ施設④である。また，Volksbank-Raiffeisen（いわばドイツの農協系銀行）や穀物倉庫などRaiffeisen関係諸施設が⑤（北西側1区を含む）を占めているが，その利用の様子などについては詳細を調査をしなかった。周辺の盆地の集落の多くには，集落のシンボルとしての共同水道（水飲み場）兼噴水池がかつてはしばしば見られたが，Nauheimには1977年にもそうした施設は見られなかったし，Zehnhausen村では77年以降，集落整備運動時に設けられたりしていたが，この集落には2003年にも存在しない。なお，1977年には，集落内に食料品中心のミニスーパーが経営されていた。商業構造変化に伴って，一般に，幹線道路沿いの近隣の大きめの集落やLimburg周辺の中型スーパーなどに押されて撤退をしてしまいがちだとされているが，ここでも2003年にはまさに撤退した直後で，同店舗は衣料品店に模様替えをしていた（❶；写真44）。また，村の居酒屋は1977年には1軒（写真36；2003年撮影。①と③の間のNタイプの建物）のみであったが，2003年にはもう1軒増加した。

このNauheim集落は，Zehnhausen村同様，集落の中心部の景観は古い伝統的な建物構造と佇まいを保ちながら，美しく維持されており，豊かな集落であることを示しており，機能的には，Ort縁部の景観的な郊外住宅地同様，集落全体が住宅地に変容を遂げていると言えよう。ただ，従来からの集落内にあった最小の自治行政機能中心の役は失ったし，商業サービス機能も相対的には低下してしまった。農業機能が視覚的に確認できるのは，集落西部に移転した集落外移転農家の部分に過ぎず，まさに集落としての農村は住宅地になってしまった。

Ⅳ．ドイツ農村における集落景観変化に関する研究の展望

Zehnhausen村は，農家数の大幅な減少に伴って，農地も，とりわけ畑地が減少し，一時は耕作放棄地も大規模に出現し，一方，植林地が拡大された（桜井 1985，1989，2013）。いわば農業は危機状態に見舞われた。それにも関わらず，地域経済全体としてみるならば，当該集落の世帯数も人口も増加しており，ドイツにおける問題地域にはあたらない（Böltken und Stiens 2002, S.30/31参照）。ここでは増加した家屋は，集落核Ort縁部の新興住宅地区に集中しており，それらは別荘風建物であったり，新興郊外住宅同様の建築がほとんどで，それらによって集落景観は大きく変えられた。一方，元々の集落核Ortには，伝統的な切り妻の一棟建てや曲がり屋型家屋が現在も多く，家屋の基本構造自体は維持され

ながらも，窓を大きくしたり，壁面や屋根を美しく整えられたりしていることが多い。

一方のNauheim集落では，農家数の減少は大きかったが，大経営農家が生き残り，決して農業も衰退してはいない（桜井 1983, 1989, 2013）。しかも，その生き残った経営の中核を担ったのは，1960年の当初計画よりも5倍から10倍以上もの大きな経営に成長した集落外移転農家であった。また，山地地域のようには農地も減少せず，一時の穀物の拡大期を過ぎ，生態学的にも安定したと思われる土地利用が成立してきている。集落景観は，元々の集落核Ortには伝統的な三側屋敷の建物が多く集積しており，構造上はさほど大きな変化はなく，窓が大きくとられたり，壁面が美しくされたりしながら維持されている。一方，集落核Ort縁部には，新興郊外住宅同様の大きな戸建て住宅中心の住宅が建設された。

このような農業集落の建築群として，また空間的な意味における集落景観は，Limburg地域では山地も平地も同じような傾向が認められたが，それはドイツ全体のなかでどのように位置づけられるであろう。すなわちドイツ全体では，どのような一般性が指摘され，問題点が指摘されているであろうか。先の2集落の観察結果をドイツ全体のなかで位置づけ，可能な範囲で日本と対比しながら考察してみよう。

大都市圏との関連

「1. 研究の目的」で示したように，本研究地域は，まず 国土利用計画上の分類で言えば，居住地・交通用地が25％以下の「農地・森林卓越地域」に相当し，南西ドイツ中位山地にある農村地域らしい景観地域で，ルール・ライン大都市圏，とりわけその南半に位置するケルン・ボン大都市圏からは約50km以上，ライン・マイン大都市圏（フランクフルト大都市圏）からも30km以上離れて立地し，直接的な，つまり土地利用上の大都市（Agglomeration）とこの大都市と周辺地域が機能的に結びついたものとしての大都市圏（Verdichtungsräume）の外側の地域に相当する（Böltken und Stiens 2002. S.30/31. Stiens 2002. S.36-39.など参照）。

この農村的，農業的に特徴付けられたドイツにおける国土計画上の「農地・森林卓越地域」は，平地を中心とする「農地卓越地域」とともに，いわば「非都市地域」あるいは「農村地域」という類型地域であり，土地利用上は今日でもなおドイツの国土全体では最も広い面積を占める土地利用類型地域の1つである。その居住地域の現象については，二つの視点から考察できる。すなわち，ひとつは集落の平面プランで，集落形態論に繋がる話しであり，もう一方はそこにある農家の屋敷取りと立面図・建築物としての家屋タイプの問題である。

HarversathとRatsny（2002, S.50-53.）は，ドイツのナショナルアトラスの中でこの集落形態を2.5万分の1旧版地形図を利用して簡単に説明している。これによれば，農村の集落形態を以下のような8類型に分類している。すなわち，1. 孤立荘宅，2. 小村，（地図では例としては説明されてない類型として「密集度の低い塊村」も挙げている），3. 密集した塊村，4. 林地持ち分村，Hagendorf（その亜型としてか，湿地持ち分村，泥炭地持ち分村，Fehnkolonienをも挙げている），5. 密度の高い路村（その亜型としての密度の低い路村）6. 広場村，7. 円村，8. グーツ農場とその村落である。そして，この分類に近い類型の分布図として，Ellenberg（1990）の研究を引き，それら類型の卓越か，副次的か，という重み付けをして，さらには「隣接地域にある村落形態の混合のよく分からない形態」を加えて地域区分図にしている。この類型分布図によれば，Limburg地域のうち，盆地地域は「密集した塊村地域」に相当し，山地地域に向かうとそれが副次的になり，「疎な塊村地域」，「疎な塊村と小村の混合地域」となっている。なお，歴史地理学者のBorn（1977）は，各農業集落形態の進化・発展を論じており，この集塊村の発展タイプを考慮すればあまり小村，疎塊村，密集した塊村の別は程度の問題であり，そう気にせずに済みそうである。

なお，ナショナルアトラスでは，同じくHarversathとRatsny（2002, S.48/49.）が農家家屋タイプの地域性をまとめているが，これではLimburg地域は中部ドイツの農家タイプとして扱われていて，三側屋敷（Dreiseithof）や四側屋敷（Vierseithof）をはじめ，様々な農家タイプが存在するとされている。しかも，山地と盆地間には大きな差異があるようには示されていない。一方，Schröderの類型と類型分布図では（Henkel 2004. S.245所載），平地地帯が三側屋敷・鍵の手（曲がり屋）家屋（Hakengehöft）の地域とされ，山地地域は一棟建て（quergeteilte Einhäuser）の地域に相当しているように見える。この分類の方が筆者自身の観察とよく対応しているように思われる。

いずれにせよ，こうした伝統的な集落形態や農家タイプの分布や発展過程の議論も興味深いが，筆者が関心を持ったのはそれら伝統的な形態が近代化の中でどう変化したかである。そして，先の二章で示した結果から見られるように，平面的には集落形態はかつての集落核Ort周辺に整形の宅地の団地を形成しながら伸延・拡張していることは印象的であった。また，農家数が大幅に減少しているにも関わらず，伝統的な家屋形態は，建築構造としては予想よりも大きな変化はしていないことに強く印象づけられた。しかも，皮肉にも，農業を継続している農家では，農業を止めた農家に比べ，農業構造の変化に合わせて経済部分を新築したり，大きく建て直しており，それが集落間の広く広がる農地の真ん中へ移り住んだ集落外移転農家や集落核Ort端に立地する形で経営されている。さらには，その農家母屋は伝統とはかけ離れた，いわば単なる一般住宅であり，経済部分は，無機的な大きな作業場・農業機械置き場が脇に添えられるという風景になっている。

Henkelは，1993年にまとめた“Der Ländliche Raum”初版において，農村地域の見方として先にも示したドイツ政府のRaumordnungsgesetzに基づく国土計画・地域計画を用いて，農村地域を分類し，説明している。すなわち，国土を大きく二つ，都市地域（Verdichtungsräume）（それが1.大都市圏地域，2.地方都市圏とその周辺に細分される）と農村地域（ländliche Räume）に分ける見方である。[1] これらは，1968年の国土計画大臣会合で導入されたタイプ区分であり，ドイツ建設・国土計画省の公式プラン地図として利用されている。Henkelの同著2004年4版ではドイツ建設・国土計画省の2000年版のKreisの統計を基にした地図が引用されているが，そこでは，居住地人口密度と人口30万，10万以上の都市を核として抽出するような形式で大都市圏を区別しており，それによれば，「大都市圏（Agglomerationsräume mit ihrem Umland)」が，面積ではドイツの27%，人口では52%を占めていることになっている。次の類型，「都市化傾向のある地域（Regionen mit Verstädterungsansätzen)」は，面積で国土面積の43%，人口では34%である。次は「農村地域」であり，発展上の問題が非常に強い地域として，ベルリン以北の東ドイツ平野部，ベルリンの南の地域，チェコ国境地帯が示されている。BöltkenとStien（2002, S.31）は，ドイツ建設・国土計画省の公式プラン地図から，問題地域（Fordergebietとländerliche Räume mit Entwicklungsprobleme）を引用し，県別統計に基づいた同様の3大分類（Agglomerationsräume, verstädte Räume, ländliche Räume）とそれらの関係地域を示し，さらにそれらを統合する形で，「大都市圏と農村地域」の区分図を作成しており，発展上の問題が深刻な地域と発展上の問題はそう大きくない地域が指摘され，これに補入し，重ねる形で「景観的に魅力に富んだ地域」を示し，大都市に含まれなかった2万以上の都市（2から5万，5から10万，10から15万）を示して国土計画の柱として説明している。

これらの国土計画資料地図類から言えることは，研究地域・Limburg地域は大都市圏とその直接的な関係地域ではなく，「都市に近接するか都市住民化した地域」にすべて収まり，言わば広い意味での「都市近郊地域」，「郊外化地域」とも呼べる地域に相当するということである。

これに関連してHenkel（1993. S.210）はGormsenとSchurmann（1989）のモデルを引用して，都市の影響下におかれた立地に恵まれた農村・発展農村と，辺縁地域に見られる衰退農村を対比している。こ

のモデルでは，農村に居住する人口構成の変化を，立地条件の良い都市周辺では一時的には専業農業がそれなりに生き残るが，その後はその割合は僅かになり，兼業農業人口も急速に減少し，農業が衰退し，元々の集落住民は都市への通勤者になり，一方で都市への就業者が増加すると説明している。ところが，辺縁地域農村では，同じような農業人口の変化を示し，集落の住民の通勤化が進行する一方で，都市住民の居住・流入がない。その結果として村が衰退するというモデルである。当たり前のモデルではあるが非常に説得的である。その結果，住居で言えば，成長する恵まれた立地の農村では新築の建物が増え，同時に昔からそこに住んできて農民的な生活様式に結びついている人も多いことを示している。一方，恵まれない立地の農村では新築される建物も少ないし，そこに住む昔からの住民も少なくなるという。

すなわち，農村の動きを見る上で大都市圏，都市圏との関連で，その立地条件を見ようとしているのである。こうした見方で言うなら，研究対象地域・Limburg地域はライン・ルール大都市圏にも，フランクフルト大都市圏にも含まれないが，大きな意味では都市近郊地域，郊外化地域に相当し，その農村部であるとのカテゴリーに分類される地域にあたる。先に紹介した，ドイツ建設・国土計画省の2000年版のKreisの統計を基にした地図，すなわちHenkelの2004年版の著書中の図71と表9の説明（Henkel 2004. S.71/72）では，このタイプの地域に分類された郡数が188で，ドイツの全郡数440の43％であり，面積でも43％，人口では34％を占める地域である。次に，筆者が，しばしば観察することが出来たBonn周辺農村と対比しながらこのLimburg地域の集落の景観変化を検討することにしよう。

Bonn周辺地域との対比

すなわち，ここで対比しようとするBonn周辺農村は，ライン・ルール大都市圏の大都市そのものか，周辺の高度人口集積地域に相当し，面積や郡の数ではドイツ内では決して多くはないが，フランクフルト（ライン・マイン）大都市圏，マンハイム・ハイデルベルク（ライン・ネッカー）大都市圏，シュツットガルト大都市圏，ミュンヘン大都市圏，ニュルンベルク大都市圏周辺に見られるタイプの大都市近郊地域農村といってよいであろう（Böltken und Stiens 2002. 参照）。

Bonn周辺農村については，1994年と1995年夏にBonn市内に位置する近郊農村集落Vilich，GeislarとBonn近郊の小都市Euskirchenのすぐ東に位置する集落Kuchenheimを調査し，2003年にはBonn近郊のAlfter村や，すでに市街に取り込まれた古い集落核周辺を調査，観察した。[2] 第二次世界大戦後首都機能が整備される形で都市が成長し続けたBonn周辺のこれら農村集落は，すでに郊外住宅地の観を示すところも多いが，それでも，Ort・集落核には伝統的な家屋タイプが維持されており，新しい都市住民の大半は，その旧Ort周辺に計画的な区画をなして新興住宅地を形成し，集積した。当然，旧集落核Ort内にはかつての農民であった住民の多くが現在もなお居住し続けているはずであるが，かつての農舎である納屋なども維持・管理していることが多かった。また，農業を止めてしまった住民がそこに住み続けていることが多いことは当然であるが，農業は止めても，農舎も中庭も，すでに農業用には利用していないという意味も含め，用途を変えながら，外観の構造を変えないで利用し続けているのである。一方，集落核Ortでも所有の移動などもあったであろうし，新住民も流入してるであろうが，その伝統的家屋景観は保持されており，全く新しいタイプの都市的住宅，新興住宅地のような建物が建設されていることは少ない。とくに興味深かったのは，豪華で立派な建物は誇りもあって維持されるであろうことは予想できるが，時には粗末な小さな付属建物でしかなかったであろうと思われるような小屋が，白壁に塗られて，美しく維持されているような例がBonn市内のVilichでも，Mehlen西側の小集落などでも見ることができた。また，Bonn市内のGeislarでは，Ortに，かつての納屋を改造して新しいタイプの

集合住宅を建てる例も見られた。同時に，乳牛を多頭飼養する専業農家もOrt端に立地し続けていた。すなわち，1970年代には，しばしば家畜飼養の臭い公害のための都市住民との対立などが危惧されていたが，技術的克服や都市住民の意識変化などもあってか，近年ではさほど問題にならないようになったのであろうかと思われ，大都市近郊農村部におけるこうした興味深い共存現象が観察出来た。それでも，もともと園芸農業を中心に営んできたAlfter村以外では，生き残った多くの農家は農舎の拡大が必要なことが多いため，集落外へ移転している農家が多かったし，少なくとも集落核Ort端に立地する農家も多かった。集落核Ortに残り続けている農家の多くは，農舎の拡大が難しいためもあってか，経営規模の拡大は抑え，混合的な経営を模索しながら農産物の庭先販売を行うなどによって収入を補っているものが少なくなく，地域住民との接触の大きさをうかがうことができた。

なお，筆者が観察したこれらBonn周辺農村集落は，Bonnの衛星都市とも呼べるMeckenheimの工業団地開発地域などを除けば，Bonn市の性格上，工業用地への転用は少なく，ほとんどすべての転用農地が住宅地開発用地となっていた。

これらのBonn周辺の集落は，母都市Bonn及びEuskirchenなどの中心部・主要駅との間のバス交通も確保され，周辺近郊住宅地部分の人口増加に支えられてかつての村の中心部などにミニスーパーが設置されているところも多く，その周囲には昔から続く万屋的な小売商・ミニスーパーや，たとえばパン屋などにも新しいタイプの系列型専門小売店の形で立地している。人口増加が大きく，かつての集落規模が大きかった場合には，それなりのサービスセンターとして機能を保持できていることが少なくない。こうした都市化した，ないしは郊外化した農村地域のサービス機能の残存の条件，継続の特色についてはHenkel（1993）やGormsenら（1989）も指摘している。すなわち，都市住民の増加によって，農村地域のサービス施設の衰退・減少はかなり抑えられているとみられている。当然，新しいタイプの都市周辺に立地するショッピングセンターの集客力もそれなりに大きいから，そうした施設が近隣地域に立地した場合は影響を受けることもあるが，母都市中心部の専門店街，中核大型商業施設からなる中心商店街へも，市営のバスや路面電車・LRT・地下鉄，DBの近距離高速鉄道利用の改善などで利用可能であり，機能分担しながらそれぞれの中心がサービス機能を分担しているように思われる。当然，元々小さかった集落や地方スケールでも公共交通のネットワーク上辺鄙な集落では，それら機能が低下し，公共交通の便も次第に悪くなり，乗用車への依存が急速に高くなっているところもある。

都市化・郊外化と農村景観変化

こうした大都市圏周辺部の農村の集落構造とその変容の観察を踏まえ，また，ドイツ全体の農村における農村集落の機能変化をドイツ全体という大きな意味で考えて見よう。

日本における過疎農山村のように，人口減少が進み，集落機能が低下している地域もドイツにも当然ある。それらは，先のGormsenとSchulmann（1989）のモデル的な説明にある立地条件の良くない地域であるが，それが国土計画の地域モデルでいう「農村地域」に相当し（Born 1977，Harversath und Ratsny 2002, Henkel 1993），実際にドイツ全体の人口変動でそのモデルが妥当であることが支持されよう。それらは，東ドイツの多くの地域と旧西ドイツではフュンスリュックやバイエルンの山地地域に多く，Henkel（2004, S.58）もGormsenとSchulmannが1986年に調査したラインランド・ファルツ州のBad Kreuznach郡のBärweilerにおける空き家の多くなった事例を紹介している。

HarversathとRatsny（2002. S.52/53）も，近年における農村の集落景観の変貌について四つのタイプに分けて紹介している。以下，その抄訳として農村集落の変貌をまとめておこう。

タイプ1は大都市圏の縁辺の都市化圧力が強かった地域にあり，かつての農業の色彩が強かった村が

島状に残り，そこを新しい居住地域と中小企業地域が環状に取り囲んでいるような集落タイプである。こうした村々では，建物は増加し，集落における経済的・社会的機能の追加・強化が現れており，経済的な利益がもたらされている。また，社会的には，一般には，元々の住民と新たに居住した人との間の溝が生じるといった問題があるというし，Henkel (2004) は都市化圧力，具体的には住宅地，中小企業用地などの拡張が農村集落秩序を混乱させている一方で，住民には就業機会と都市インフラの享受機会をもたらすとしている。

タイプ2も大都市圏に近い恵まれた位置にあるが，都市化そのものには直接侵されていない地域で，集落の再活性化と集落再開発が際立った特徴になっている。[3] 村の伝統を配慮することで，建築物の関係の上でも，社会的な面に関しても，古い集落構造がルネッサンスを迎えている。集落の地域的個性ないし地方に共通する個性という点では，しばしば，元々あったし，そうでなくても新たに工夫されていくことになった。Henkel (2004) は，この種のタイプの農村は都市の恩恵を受けつつも害は免れるという，いいとこ取りができる農村地域であると積極的に評価しているようである。農村の姿を保った郊外化地域とも呼べよう。

タイプ3は，広域的な観光産業に彩られた集落で，建物の維持・修理がさらに重要な意味を持ち，観光業の振興にもそれらが重要な役割を果たしたような集落である。それは集落のイメージの上で決定的に重要であったからである。村の城壁を改修し，修復を図ること，慣習や村のまとまりを維持することが民俗的な諸特徴を示すことになり，それが地域の魅力を引き出すことになった。アルプス前山地域やシュヴァルツヴァルトの山間地などが事例になるのだろうか。

タイプ4は，辺鄙な周縁地域で，今もなお農業的に特徴付けられる地域であり，多くの農村集落の建物がそのまま維持されるのみである。[4] 人口は減少し，学校，郵便局，生活必需品を購う商店，田舎の食堂兼旅館，村役場などの村の共同体的な中心機能はとうになくなってしまった。技術的な標準化の要求があったり，生活に最低限不可欠な要求があるところだけが建て直され，それ以外は単に引き継がれているだけであるというようなタイプである。

KlausとHahn, Popp (2002 S.22/23) は，農村の発展の主な潮流ついて指摘しており，西ドイツでは「我々の村を美しく！」いう謳い文句のもと，第二次世界大戦後，農村再開発の最初の波が訪れたのだという。ZehnhausenのOrt中心の広場のモニュメントはこの事業に関連して設置された。第二次世界大戦後の激しい農業の構造変化にともなって，多くの村々が急速に変貌を遂げた。東ドイツ地域では集団化が西ドイツ同様に重大な分岐点となったという。生産性の向上と結びついた機械化，土地利用の適正化という経済的目標と，生活様式の近代化が刺激となって，両ドイツ地域で，農村構造への多大な影響が及んだ。Zehnhausen村そとその周辺やNauheim集落やその周辺に見られた集落外移住や耕地整理事業の進展はその例である。1950年代から1960年代に起きた集落外移住と耕地整理事業は西ドイツ全体で集落景観を大きく変える変化で，言わば，集村地域と小村地域に散村が新たに作られた様な変化であった（Henkel, 1993)。

戦後復興の目標としての近代都市再建に関連し，周辺の農村地域の集落も近代化の渦中に巻き込まれた。建て直し，新たな建設ないしは崩壊と取り壊しが行われ，根本的な建物更新もあった。新建材も導入され，ファサードが改装されたり，大胆に大きく切り出した窓が作られたり，近代的なドアが設置され，1960年代には伝統的な農家屋敷の「美化」がこうした農村の近代化の象徴となったのだという。

また，1970年代になると，村再開発計画 (Dorferneurungsprogramme) では，古い伝統的な集落景観が喪失されていることが強く意識されるようになり，村という生活空間の再構成に努力が払われていくことになった。しかも，同時に，村のバイパスの建設を通じて村内交通道路の整備は緊急の課題となっ

た。実際，バイパスが作られない場合でも，幹線道路の集落入り口に少々凸の障害を設けたり，狭窄部を設けてスピードを制限させるように工夫もされたし，Nauheimでは幹線道路から集落内の主要道へのアクセス部もインターチェンジ風にカーブを設けるような形で作られた。また，とくに均分相続制の地域では，もともと零細な兼業経営が多かったし，都市化も早かったので，中小企業用地も併せて設けられるようになった地域も多い。

したがって，筆者が1976，7年に目の当たりにした農村像はすでにこれらの「近代化」以降のものであったことに注意しないといけない。

1980年代になって初めて村の再活性化が主題になってきた。すなわち，個性的な建築物，その村に特有な建築材料の維持，供給，管理，調整といった分野で，機能的な劣化・不良を改善していくことが中心課題になったのである。Zehnhausenの村内道路の整備はこうした事例なのであろう。1990年以降，第3次産業化とエコロジー運動の活発化が農村地域の集落イメージを改善させることになってきている。

農村地域の住宅地としての評価が高まったのはとくに1970年代の郊外化以降である。第3次産業の成長とともに，農村地域の評価は，労働力の立地点としても益々重要になってきている。また，間接的ではあるが，環境意識の高まりの結果，農村集落の固有の価値が多くの人々に認められることになった。農村地域はもはや都市の手本と言うより，独立した内在的な潜在力を秘めた地域になった。

村落の発展は複雑な過程を辿ってきたが，働く場として，故郷として，村と自然の経験としての農村地域の集落は，かつては都市地域と比べ居住地域として劣っているとみられてきた。しかし，今日では農村地域の集落が諸側面でとくに目立った素晴らしい美点をもつと評価されるようになってきている。こうした農村地域の集落ルネッサンスの恩恵を受ける地域は旧西ドイツ地域ではとても広い。こうした村々では集落や農地にかつての古い時代の景観のなごりが今なお残されており，それが住宅地域としての貴重な資源になってきている。当然，農村が無力で，外的に（都市の影響で）決まってしまうという形で言われる悲観的な将来像もある程度ドイツの縁辺地域には当てはまるが，旧西ドイツ地域農村のかなりが，好ましい住宅地として発展していると考えられよう。[5)]

Henkelは，農村地域の村が居住地としていかに好まれているかも示している。それによれば，本研究地域内にあり，Zehnhausen村のすぐ南に位置する山地地域の村Elsoff村での調査結果から，1982年には人口の88％が村に住みたいとの希望を有していたし，95年でも86.5％を占めており，一方，82年には11％が小都会に，数人が大都会の郊外に住みたいとのことであったという。95年には，なんと大都会の郊外に住みたいとの希望をしたのはたった一人になっていたという（Henkel 1993, S. 79ff.）。これは，多くのドイツ人の居住地の希望傾向とも一致しているようで，アレンスバッハ世論調査研究所Allensbach Inst.（1976）によれば（Henkel, 1993, S.82），全体の57％が村に住むのが幸福だとしており，12％が町に住むのが良いとしていたという。同じ研究では，村人だけについての調査結果も明らかにしており，その71％が村に住むのが幸福だとし，2％のみが町の居住を希望していたというし，大都市居住者でも44％が村に住みたいと言い，都市に住もうというのは21％に過ぎなかったと報告しているという。また，住宅の種類でいうならば，1985年のデータでは（マッサー他著 1994, p.126），戸建て住宅への志向が強くなっており，こうした希望を背景に，また自動車交通の一般化に支えられて，郊外地域が一挙に拡大したわけである。その受け皿となったのは，決して大都市周辺の郊外だけではなく，恵まれた立地環境下の農村地域の集落核Ort周辺でもあったわけである。

こうしたドイツ人の田舎好みは年齢による差異もあり，HenkelはMayの研究を引いて，若者（15歳から21歳まで）が，自由時間のための施設不足と社会的な規制の大きさを揚げて，他の年齢と大きく異なり，田舎を居住地として嫌っている割合が少々高いとしている（Henkel, 1993, S.82）。そうした若者

の田舎嫌悪は，村の習慣や宗教的伝統などの側面に強く表れ，村のまとまりの良さが魅力的であるという点では老若の年齢差は出てこないとしている。このMayの研究からは農村地域の村の良さは，自然環境の良さ，社会的関係，田舎の雰囲気が挙げられていたとされ，問題点としては交通条件，自由時間のための施設・設備，文化的刺激，就業機会などが挙げられたという。先のElsoffの研究では，住民の「時間の使い方」の好み1位が「家や農家の仕事」，3位が「庭仕事」となっているとされ，住民が田舎生活を好む理由がそこに明快に現れていると言えようし，いわば日本におけるある種の自給的農業が理想の形になっているような気さえする。

このように，一般には，とくにそこに住む村人からは当然であるばかりでなく，ドイツでは，農村は居住地として高く評価されている。一方で，農村は国土計画などでは問題地域とされてしまいがちなのである。

まとめ

住宅地としての農村は，とくに旧西ドイツ地域では，大都市や大都市圏中心に成長してきたが，とくに公共交通網の利便性に恵まれた農村地域や美しく維持された集落核や周辺農地を持つ農村地域が際だって成長しているように思われる。これは原因でもあり，結果でもあろう。しかも，1970年代までは，農業が住宅地としての魅力を殺す側面が，たとえば家畜経営における臭い問題などが指摘されていた。しかし，近年では，一般には生き残る家畜経営ないし畑作との混合経営の多くは，畜舎の増築・拡張が不可避であるし，そのため旧西ドイツ地域の南西部，均分相続制地域の集塊村地域では，集落外移転農家の中から生き残る農家が発生することも多かった。言い替えれば，生き残るためには集落外に移転するしかなかったか，もしくは生き残れた農家は幸運にも集落核Ort端に立地する農家であった。この結果，かつて予想されたほどは，農業が住宅地としての魅力と対立するものではなくなっているものと受け取られているし，集落核Ort縁に成立する新しい住宅地は，農業から影響を受けることも少なくなっていることが多いようである。

また，畑作専業農家などは，百ヘクタールを超える大規模な経営になりつつあり，当然，集落核Ort端でも規模拡大は困難で，集落外移転農家から発生しており，農業集落における生きた農業景観は，僅かに生き残った集落核Ortからは遠い広い農地の真ん中に立地するこうした新しいタイプの農家建物でのみ見られることになった。こうした農家は，いわば近代的・合理的な経済部分をもっていて，逆に集落核Ortの農村景観はいわばかつての伝統的な農業様式を形式として保存し，維持されている，いわば過去の農業景観を反映したものになったと言えそうである。

こうした住宅地の集落核Ort縁部における展開は，大都市圏の集落周辺だけでなく，旧西ドイツ地域などで言えば，国土の縁辺地域以外の多くの地方中小都市周辺でも認められるようになっており，国土全体が都市化した，郊外地域となったという状況になっている。Limburg地域はその好例であると言えよう。また，同じような変化はフランスなどでも同様に進行しており，パリ大都市圏周辺ですらも，園芸農業以外では大規模経営だけが生き残り，非常に広大な農地が残存してはいても，農業人口の密度は非常に小さくなっており，実質的には広い農地に囲まれてはいるがまさに都市郊外と言ってよい（桜井明久他 1998参照）。

山本・田林らは（1987），すでに1970年代後半以降には，兼業機会の有無をもとに日本の農村空間を類型化し，日本全体の農村地域が一般に考えられているよりも（一般には，土地利用上の都市侵入・侵出が目立つ地域より）広範囲に都市化しつつある状況を示したが，それはドイツでも同様である。ドイツでは日本より早く都市化してきたと言えよう。すなわち，日本と旧西ドイツ地域で異なるのは，マクロスケールで言うならば，ドイツの都市化が早めに始まっており，しかも両大戦間に公共交通の発達に支

えられる形で進行し，農業からの離脱もそれらの沿線などで進み始めていた点にあろう。また，マイカーの普及に伴う労働力の都市化は，西ドイツの方が少し早くは始まってはいるが，日本との時期のずれはそう大きくはなく，その進行の急速さは日本においてより顕著であったようである。また，農業の構造変化は日本ではより遅めに始まり，農業の多様化を経て，急速に離農が進み出してきたが，旧西ドイツ地域では第二次世界大戦後の離農はまさに急速であり，多様化よりは大規模化の進行が際だっていたように思われる。とくに大都市圏内の農村地域では集落核Ort面積を超えるような大面積の住宅地が集落核Ort周辺を中心に，また工業用地が集落周囲一般に形成される事例が多々あった。

日本と旧西ドイツ地域の農村地域の変容に関して異なるのは，メソスケールで言うなら，大都市圏のみならず，地方都市周辺地域の都市化も第二次世界大戦後は深く急速に進行している点であり，地方の中小都市が順調に高度化していくのと歩調を合わせながら，大都市圏以外の農村地域全体が都市化していった点にあろう。そこでは，大都市圏と，規模は小さくとも地方都市圏でも同様に，集落核Ort周辺を中心に住宅地が形成され，工業・その他産業用地も集落内に作られた。

また，ミクロスケールで見るならば，旧西ドイツ地域では，農村地域における住宅建設が一般的には集落核Ort縁部に連接する形で集中して起きていることが多く，しかもその住宅地開発が計画的になされているので，スプロール的な住宅建設は希である。それは，他方，農業の構造改善にも役立っており，優良農地が分断される程度は日本に比べ大きくはなく，農地区画は拡大が可能であったし，区画整理と併行する交換分合によって農地の分散の克服にも役立っている。ただし，ドイツにおける規模拡大のスピードは大きく，益々，区画拡大，経営地の整理・統合化の要求が高まっている。また，生き残った農家は，居住部と経済部を分離しつつあり，経済部拡張の要求はとくに旧西ドイツの均分相続制地域では，村落外移住農家がその役を担ったため，それが可能でもあったし，農業に関わる景観は，古いものだけが集落核Ortに遺物のように残されることになり，それは伝統的景観として尊重され，保持される形になってきている。しかし，逆に言えば，産業としての農業を反映する建築物は機能的ではあっても，けっして美しいものとはならず，それらが村の外に設けられている。

いずれにせよ，日本では，ミクロスケールにおけるスプロールの弊害の大きさが，農業規模拡大を困難なものとし，農業の多様化を指向させ，農産物そのものの変化を伴って進行したのに対し，旧西ドイツ地域では，農産物自体の変化，多様化，高級化はけっして大きくはなく，農産物はあまり変えずに，経営規模拡大を通じての構造変化を可能にしてきたように思われる。

また，日本では，経済部分の変化を伝統的な集落核にも持ち込むことも多く，集落景観の混乱を倍加していることになっているのかも知れない。一方，旧西ドイツ地域では，中核部の旧農家家屋の多くの建築物は住宅である母屋ばかりか，母屋以外の建物までも，離農後もその基本構造を変えずに使用され続ける傾向は強い。この結果，旧西ドイツ地域の大都市風辺郊外部でさえ，かつてのOrtの範囲を景観的に確認することが容易に可能であることが多いし，集落核Ortの景観的な確認は中小都市周辺の郊外ではさらに容易である。日本ではこの種の研究を見たことがないが，日本の農村の旧農村集落部の建物類は，離農と都市化の進展とともに，旧西ドイツ地域と比べ，大きく変化していく傾向が強いように思われる。当然，旧西ドイツ地域でも旧農家の建築物を大きく変え，一般住宅となる例も認められるし，そのことが景観や美観上の観点から問題であるとの指摘もある。しかし，一方では，ドイツでも，結局ドイツ中が一般的には同じ建物になっていくという指摘もある。これらの変化の激しさは日本よりはずっと小さいように思われる。

そして，平面的には集落形態はかつての集落核Ort周辺に整形の宅地を団地としながら，新興郊外住宅地として伸延・拡張していることである。筆者が調査報告した二つの村の事例とBonn周辺地域の観

察からは，その郊外住宅部の面積の大小は，当然ながら移り住む都市住民の大きさによっており，専ら母都市の発展性，母都市への近接性，利便性などによるらしいということである。

この結果，旧西ドイツ地域の多くの農村では，すなわち，かなりの辺縁地域農村部以外は，かつての農村は，農業の自然環境が牧草地に適していても，畑作農業に適していても，ブドウ栽培や果樹・野菜栽培の伝統のある農業地域ですらも，景観上は広い農地に取り囲まれたのどかな農村のままであるが，実質的には，機能的には，郊外住宅地になってしまったと言えそうである。

筆者が観察し，調査したドイツ農村の事例は僅かであり，不勉強のため，対比すべき日本の研究事例も手もとにはあまりない。今後，ここで示すことが出来たような，ドイツの農村集落景観変化の事例を土台として，脱工業化段階を迎えた他の西ヨーロッパなどの先進工業国と対比しつつ，[6] 日本における調査研究の蓄積を行いたい。

謝辞

本研究は，2003年度駒澤大学在外研究における調査結果の一部である。2004年4月の帰国後，様々な事情が重なり，研究成果を公表できないできた。このことを深くお詫びいたしますとともに，この在外研究の機会を与えてくださった駒澤大学，ご支援くださった地理学科の皆様，Bonn大学地理学教室とH.-D. Laux教授に心からお礼申し上げます。また，製図をお願いした富永俊輔氏にも厚くお礼申し上げます。

注

1）また，BöltkenとStiens（2002）も同じ分類基準の地図を引用して説明している。

2）未発表。なお，景観観察のための基礎知識として，周辺農村のアウトラインについては，Laux, H.-D. und Zepp, H.やBöhm, H. u. Mehmel, A.およびBossmann, M. Kleefeld, K.-D. u. Grunert, J.1などStiel, E.（Hersg.）の “Die Stadt Bonn und ihr Umland” 2.Aufl. Arb. z. Rhein. Landeskunde, H.66.所載の文献がよい参考となった。

3）Harversath und Ratsny. 2002; S.53，図11では，Wetzlarに近い，すなわち研究地域であるLimburg地域にも近いHuettenberg-Reiskirchen村の例が示されている。

4）前掲3）S.53の図12では，Passauに近いWegscheid-Kramerschlagの例が示されている。

5）Henkel 1993。また，Laux（2001）によれば1939年以降の人口動態からも旧西ドイツ地域の大半が人口増加している様子が分かる。

6）都市郊外農村と都市住民の住宅などの関係などについては，たとえば，ブライアント他著・山本正三他訳（2007 pp.8-18）やハート著・山本正三他訳（1992 p.232・233）の都市と農村の混在性に関する議論など参照。

文　献

桜井明久 1983. 南西ドイツLimburg盆地の一村落Nauheimにおける農業的土地利用の変化. 地学雑誌 92-5；19-41.

桜井明久 1985. 西ドイツ Hoher Westerwald の一村落 Zehnhausen における農業的土地利用の変化. 人文地理37-2；26-51.

桜井明久 1989.『西ドイツの農業と農村』古今書院.

櫻井明久 2013. ドイツ，リンブルク地域における1970年代以降の農地利用変化. 駒澤地理49；11-34.

桜井明久・高橋・手塚・村山・菊池 1998. パリ大都市圏近郊外縁部における農村の景観とその変容. 高橋伸夫・ジャン・ロベール＝ピット・手塚　章編著『パリ大都市圏　-その構造と変容-　』東洋書林；162-189.

マッサー，スイデン，ヴェーゲーナー著・村田武・横手・石月・田代・横川訳　1994.『21世紀ヨーロッパ国土作りへの選択』技法堂出版；126.

山本正三・北林・田林明編著 1987.『日本の農村空間』古今書院.

ブライアント，ジョンストン著・山本正三・菊地・内山・櫻井・伊藤訳　2007.『都市近郊地域における農業―

その持続性の理論と計画―』農林統計協会；8－18.
ハート著・山本正三・桜井・菊地訳 1992. 『農村景観を読む』大明堂；232/233.
Böltken, F. und Stiens, G. 2002. “Siedlungsstruktur und Gebietskategorien”, *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland; Dörfer und Städte*. Mitherausgegeben von Klaus, F., Hahn, B. und Popp, H., Spektrum Akademischer Verlag Heidelberg・Berlin, S.30/31
Böhm, H. u. Mehmel, A. 1998. Das Vorgebirge – Suburbanisierung einer Gartenbaulandschaft –, Stiel, E. (Hersg.) Die Stadt Bonn und ihr Umland. 2.Aufl. *Arb. z. Rhein. Landeskunde*, H.66, S.99-124.
Born, M. 1974. *Die Entwicklung der deutschen Agrarlandschaft*. Wisssch. Buchgesell., Darmstadt.
Born. M. 1977. *Geographie der ländlichen Siedlung* 1, Tuebner Studienbücher, Stuttgart.
Bossmann, M. Kleefeld, K.-D. u. Grunert, J. 1998. Der surburbane Raum im Südwesten von Bonn；Stiel, E. (Hersg.) “Die Stadt Bonn und ihr Umland” 2.Aufl. *Arb. z. Rhein. Landeskunde*, H.66, S.151-164.
Ellenberg, H. 1990. *Bauernhaus und Landschaft in ökologischer und historischer Sicht*. Stuttgart..
Gormsenn, E. und Schurmann, H. 1989. Strukturforschung und Plannung im ländlichen Raum, *Berichte zur deutschen Landeskunde*, Bd. 63, H.2, S.385-408.
Harversath, J.-B. und Ratsny, A. 2002. Traditionelle Ortsgrundrissformen und nuere Dorfentwicklung. *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland; Dörfer und Städte*. Mitherausgegeben von Klaus, F., Hahn, B. und Popp, H., Spektrum Akademischer Verlag Heidelberg・Berlin, S.50-53.
Harversath, J.-B. und Ratsny, A. 2002. Bauernhaustypen. *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland; Dörfer und Städte*. Mitherausgegeben von Klaus, F., Hahn, B. und Popp, H., Spektrum Akademischer Verlag Heidelberg・Berlin, S.48/49.
Hänsgen, D. und Hantzsch, B. 2002. Deutschland auf einen Blick. *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland; Dörfer und Städte*, Mitherausgegeben von Klaus, F., Hahn, B. und Popp, H., Spektrum Akademischer Verlag Heidelberg・Berlin, S.10-11.
Henkel, G. 1993. *Der Ländliche Raum*. Tuebner, Stuttgart
Henkel, G. 2004. *Der Ländliche Raum*. 4., erganzte und neue bearbeitete Auflage, Studienbuecher der Geographie, Gebruder Borntraeger Verlagsbuchhandlung, Berlin・Stuttgart.
Klaus F., Hahn, B. und Popp, H. 2002. Dörfer und Städte－eine Einfürung. *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland; Dörfer und Städte*, Mitherausgegeben von Klaus, F., Hahn, B. und Popp, H., Spektrum Akademischer Verlag Heidelberg・Berlin, S.12-25.
Laux, H.-D. und Zepp, H. 1998. Geooekologische Grundlagen, historishe Entwicklung und Zukunftsperspektiven; Stiel, E. (Hersg.) “Die Stadt Bonn und ihr Umland” 2.Aufl. Arb. z. Rhein. Landeskunde, H.66., S.99-124.
Laux, H.-D. 2001. Bevölkerungsentwicklung. *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland;Bevölkerung*. Mitherausgegeben von Gans, P. und Kemper, F.-J. Spektrum Akademischer Verlag Heidelberg・Berlin, S. 38/39
Sacks, K. 2002. Zentrale Orten und Entwicklungsachsen. *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland; Dörfer und Städte*. Mitherausgegeben von Klaus, F., Hahn, B. und Popp,H., Spektrum Akademischer Verlag Heidelberg・Berlin, S.34/35.
Sakurai, A. 1985. Land Use Transformation in the Village of Nauheim, Limburg Basin, West Germany. *Sci. Rep. of Geoscience, Univ. of Tsukuba*, Sec. A, 6;47-81.
Sakurai, A. 1987. The Changes of Agricultural Land Use in the Limburg Region, West Germany (I). 宇都宮大学教育学部研究紀要第一部 37；63-88.
Sakurai, A. 1988. The Changes of Agricultural Land Use in the Limburg Region, West Germany (II). 宇都宮大学教育学部研究紀要第一部 38；65-84.
Stiens, G. 2002. Vom Stadt-Land-Gegensatz zum Stadt-Land-Kontinuum. *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland; Dörfer und Städte*, Mitherausgegeben von Klaus, F., Hahn, B. und Popp, H., Spektrum Akademischer Verlag Heidelberg・Berlin, S.36-39.